
彼と私と空と

ゆーくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と私と空と

【Nコード】

N5714W

【作者名】

ゆーくん

【あらすじ】

恋愛に対して消極的な彼女と、
空に恋愛を持った彼

複雑な想いを抱いている二人の道筋

第1シャッター

『《恋》？

《恋》ってなに？

《恋愛》？

《恋愛》ってなに？

《好き》？

《好き》なんてあるわけない。

この世に満ちている《好き》を信じろ？

出来るわけないじゃない

そんなこと
『

夏。

桜散り終わり

次に緑の葉が映える季節。

灼熱の太陽が私達を照り付ける季節。

そんな夏真っ只中の八月上旬。

私は、私の学校の教室で
ある男子と二人っきりでいる。

まあ、要するに告白されている訳だ。

だが、私の答えは、

「ごめんなさい。」

私、貴方なんて知らないから」

これだけ。

男子が何かを言おうとするが否や
私は足早に教室を立ち去る。

教室を出て、階段の踊り場に着いた時、
漸く、先程の男子からの呼び止めの声が聞こえた。

だが私は、当然返事する訳無く、
戻る訳も無く、
立ち止まる訳すらない。

先程の男子は、
隣の二組の人気者らしいが、
別になんとも思わない。

私が彼に思う事はただ一つ、

『なんて、理解力の低い奴だろうっ』
だけ。

学校から家に着き
財布から鍵を取り出す。

鍵穴に差し込み左に捻ると、
心地良い音と共に、鍵が開けられる。

私はそのまま、家の中に入り
一目散に二階にある自分の部屋へ向かう。

部屋の扉をあけると
直ぐにベッドへと向かう。

寝るわけではない。

「ニャー、ニャー・・・」

ベッドの上の

黒猫、『アズサ』と戯れるのだ

「アズサー、ただいま・・・」

ベッドへ腰掛け、

アズサの頭を優しく撫でてやると、

アズサは心地良さそうに、眼を閉じる。

うん、やっぱり猫はいい。

見てるだけで心がほんわりするし、

何より可愛い。

この世の大半が猫になってしまったら、

私は嬉しくて狂乱してしまうかもしれない。

それほど、私は猫が好きなのだ。

部屋の壁には、特大の子猫のポスターを貼り、
机の上には、所狭しと猫グッズが置いてあり、

カーペットは勿論、

テーブルクロスまで猫柄だ。

携帯の着信音は全て猫の鳴き声。

待ち受けだって、

ほら、可愛いペットのアズサの待ち受けだ。

「ふふ・・・」

私は、待ち受けのアズサを見ようと、
携帯を開く。

だけど、開いて後悔。

携帯の待ち受けには、
確かに可愛いアズサの寝顔写メがある。

だけど、そのアズサの寝顔の上に被さっている邪魔な表示。

『着信あり。留守番メモ、二件。
バカ・アホ』

「はぁ・・・」

またあの馬鹿共帰るの遅くなるのかよ」

留守番メモを聞く意味などありはしない。
内容はどうせ決まってる。

「仕方ない、スーパー行こ」

私の名前は一之瀬由奈。

私の両親は、

二人とも仕事人間という奴で、
私が生まれてからも、

家に一日中居るといふ事がない。

父は、

若い頃の父が建てた会社の、

母は、

父と付き合う前から勤めていた製薬会社の社長なのだ。

父と母が結婚し、私が生まれてから、

父の会社と母の会社が合併し、

より一層働き漬けになっていった。

まあ、私としては、

両親から自分の趣味に対して、

あーだこーだ言われなくて楽だが、

両親が家に居ない事により、

必然的に、

家の家事は全て私がする事になる。

家事は苦手ではないが、
やはり、めんどくさい。

やれ、テーブルクロスはこの洗剤だの、
やれ、このカーペットは石鹼となんかを使えだの、
面倒極まりない。

だから、私の食事はたいてい、
スーパーのお惣菜だ。

料理が出来ない訳ではない。
するのが面倒なのだ。

決してっ、
料理が出来ない訳ではないのだ。

そうこうする内に、
私行き着けのスーパーが見えてきた。

『スーパー上山』

このスーパーは大体夜になると、
お惣菜と飲み物が100円単位に激減するのだ。

だからといって、
マズイ訳ではない。

寧ろ、大変美味しいのだ。

だから、このスーパーの近辺には、
ワンルームマンションが多く、
一人暮らしの学生には凄く人気があり、
日中夜問わず、客足が多い。

入口の自動ドアをくぐると、
相も変わらず客が多い。

毎度の如く、8つレジはフル活動、
お惣菜や飲み物は次から次へと陳列され、開いた箇所を埋められて
いく。

「はあ、気持ち悪・・・」

私は人混みが苦手な訳ではないが、
好きでもない。

一つ溜め息を吐くと、
足早に、お惣菜コーナーへ向かう。

お惣菜コーナーに着くと、

そこは既に戦場だった。

お弁当は、

陳列されては、

全て客が奪い合う様に取り合い、

おかず等は吸い込まれる様に、

客の手の中へ消えて行った。

「はぁ・・・、

後10分位かな」

私は直ぐに、お惣菜を取りには行かず、

お惣菜コーナーの入口付近の壁際に、

背をもたれ掛かり、腕時計を眺めて、

暫く待つ。

10分後。

あれだけ居た客の影は、

一つたりとも居なくなっていた。

このスーパ―のお惣菜コーナーの特徴は、

夕方の下校時間と、

部活終わりの学生達を狙った、

限られた時間帯のみに出される、

量、質、安さ、全てを含んだ、

お弁当とおかず等なのだ。

基本的スーパー等は、主婦を狙い目に、夕方4時頃に格安物を販売するが、このスーパーは学生を中心に販売される。

計算高い主婦よりも、

若い学生の方が、

沢山食し、沢山買い占める為、

100円単位の格安さをものともせず、普通のスーパーより売上げが高い。

だが、私は知っている。

学生が買い占めた後に残された、閉店間際のこの時間帯のみ、

ある二つのお惣菜が出される事を。

私はゆつたりと、

お惣菜コーナーに足を踏み入れ、奥の陳列棚へと進んで行く。

お惣菜コーナー、唯一最後のお宝。

学生達が買い占め、

商品が無くなったと思い、

ここを去るときのみ出される、

二つの商品。

それは、

「残り物には福がある・・・」

陳列が遅れて、

学生達に買われなかった、

出来立てホカホカのスペシャル弁当、

そして、

パーティー用に陳列されるも、

そうそう買われる事のない、

肉、野菜、果物全て揃ったオードブル。

この二つの為に

私は10分もの間待ち続けていた。

「ふふ、今日も私の策に抜かりは無い・・・」

私はスペシャル弁当と、

オードブルを手に取り、

レジへと向かう。

『コツコツコツコツ・・・』

ローファアの靴音が、辺りに響く。

買い物を済ませた後、

私は少し寄り道していた。

たまに学校帰りに寄る公園、

私は今そこに居る。

此処には、大きな遊具はなく、

小さな、ブランコと滑り台、

それとベンチしかない。

だが、それを補うが様に、

公園のだ真ん中に、大きな桜の樹がある。

今は緑の葉を生やしているが、

春には満開の桜吹雪が目に見れる、

私はベンチに腰掛け、

街灯の明かりに照らされた、緑の葉を、

ぼんやりと眺める。

何か特別な意味はない。

ただ、この樹を見るのが、何故か好きなのだ。

15分位しただろうか。

私は一通りに樹を眺めると、ビニール袋を手に取り、公園を出ようとした。

だが、立ち上がったと同時に、

『カシャ、カシャ・・・』

と、カメラのシャッターを切る音が聞こえてきた。

ふと、振り向くと、

一人の男性が、カメラを持って、佇んでいた。

その男性は私ではなく、

桜の樹でもなく、何故か、空にファインダーを向けていた。

サラサラと、

風に流された黒髪が、

街灯の光を浴び、

先程の桜の樹の葉の様に、キラキラと綺麗に見えた。

だが、じっと見るのも、失礼だし、何より恥ずかしいし、

私は踵を返し、

帰路へと戻った。

第2シャッター（前書き）

先に言っておきます。

俺はギャグセンス零です；

第2シャッター

『ニャーオ、ニャーオ、ニャーオ、ニャーオ』

「ん・・・」

耳の中に響く、大音量の猫の鳴き声に、私は目を覚ます。

身体を起こし、

一伸びすれば、ベッドデスクに置いてある、ケータイに手を伸ばし、アラームを止める。

朝5時15分。

いつも私が起きる時間。

「アズサー、おいでー」

私が呼ぶと、アズサは可愛らしく、ベッドに飛び乗って来てくれた。

アズサを抱き上げ、膝の上に乗せれば、ゆるりゆるり背を撫でる。

私の朝の日課だ。

背を撫でる度に、

アズサは撥ったそうに膝に顔を擦り寄せる。

そんな仕草まで可愛いらしい・・・。

「ああ、アズサ、

どうして貴女はそんなに可愛いのか？」

クスリ笑いながら、

呟いてみれば、

アズサは、

「ニヤー」

と鳴いてくれた。

ずっと撫でていたいが、

流石にそうはいかない。

今日から夏期講習なのだ。

名残惜しいが、

最後の一撫ですれば、

耳にしたイヤホンを外し、

膝からアズサを降ろすと、

洗面台へと向かう。

『サアアア・・・』

夏独特の生温い風が、
私の身体を通り去る。

灼熱の塊が私を照り付ければ、
そこはまさに天然サウナ。

「あつぢいー・・・」

手で人工的な風を起こすも、
顔に掛かるは生温い熱気。

私は今、学校の校門に背をもたれ掛かせている。

うちの学校の夏期講習は、
学校で行われるものと、
塾で行われるものに分かれる。

たいていの奴が塾の夏期講習を選ぶのだが、
私は学校の夏期講習の方が好きなのだ。

何故なら、

塾は沢山人がいるし、
何より空気が重い。

三年の連中は受験勉強に必死になってるし、
一年連中は、
小声で長々とくだらない雑談したり、
たまにはバカ笑いしたりと、
全くもって集中出来ない。

そんな、
空気がズシリと乗し掛かる箱の中とは打って変わり、
学校というのは良い。

夏期休暇中だから、
教員生徒も少ないから集中出来るし、
どの机にも簡単に座れ、
取り合いになる事がないし、

何より、気が楽だから、
私は学校の講習を選んだのだ。

まあ、昨日みたく、
変に告白されるがな。

「はぁ・・・」
と、一つ溜め息を吐くと、
いきなり後ろから、

「溜め息すると幸せが逃げっぞ」と、声をかけられた。

私が後ろを振り向くと、校門の向こうには、茶髪の30代位の男、山瀬智也先生が呆れた様な顔付きで立っていた。

「オハヨー、ミスタートモーヤ。ニホンゴ、ジョーズニナリマーシタネ」

「おい、片言やめれ。上手もなにも、俺は元から日本男児だ。後ミスターはいらん、代わりにセンサーを付けろ」

「センサートモーヤ？」

「逆、逆っ。智也センサーだ」

「・・・、はあ、トモッチー・・・」

「センサー何処行った・・・つか、あだ名か」

「ユーモアのかけらも無い男はモテないよ？トモトモ」

「朝っぱらからおちよくる様なガキに、何故にユーモアを分け与えにゃならん。」

つか、呼び名統一させるよ」

「はいはい、

コントも終わったから、

智也センサーもさっぶいギャグ言っでないで、さっさと鍵開けてよ」

「コントした覚えもなけりや、

ギャグも言った覚えもないわっ。

つか、もうちよい言葉遣いを直しなさいよっ」

「・・・、

もういいから、黙ってさっさと、

そのノロイ動きで、鍵をお開けになりやがれや。ただでさえノロイんだから、

もっと頭の回転を早めやがれ、

クソ・・・智也センサー様野郎が」

「・・・、

悪いが、俺には何処からツッコんで良いかわからんから、

ある程度はスルーさせてもらうが、

一つだけ言わせてもらおう。

・・・お前今、

クソ野郎って言いかけたろ」

「はいはい、

無駄な言葉紡いで、

ページ増やそうとしてないで、

さっさと鍵開けるクソ野郎」

「ページってなんだっ！
つか、今完璧にクソ野郎つつたろっ！」

智也センサーとの、
スベリまくりのコントを終わらせてやれば、
智也センサーは、なんだかぶつぶつ呟きながらも、
門を開けてくれた。

「ふふ、
あんな馬鹿なコントに付き合ってくれんのはセンサーだけなんだか
らさ。
楽しかったの。
許してよ」

門を通り、夏期講習教室、
もとい、2・Bクラス、
私が何時も通っている教室に入ると、
未だぶつぶつ呟いてた智也センサーに言っただった。

「はあ、一之瀬よー。
それが俺だけなら未だしも、
お前他の先生にも喧嘩売ってんだろ」

教壇の上に立った智也センサーは、

教卓の上に頬杖をつき、

先程と同じ様に呆れた顔で切り返してきた。

「先生、それは違います。

私は、教師、教頭、校長、生徒全てに、
喧嘩を売っているんです」

「・・・、

あー、なんだ、

とりあえず、お前が半端なく馬鹿だということは、再確認出来た」

「人を馬鹿と呼ぶ前に、

さっさと講習始めたらどうですか？

私、『あそこ』に早く行きたいんで」

「物に釣られる小学生みたいだな、おい。
ま、やる気になれりやなんでもいいがな。

うっし、始めるぞ」

智也センサーが姿勢を起こし、

問題集を開くと、講習が始まった。

「正解、正解、正解、正解、っと。

一之瀬由奈、合格」

「んー、あながと」

今、

講習が始まり、

数式を覚えさせられれば、

簡易テストと言った、

智也センサーのテストを解き終わり、

解答の答え合わせをしてもらっていた。

「ったくよー、

普通に勉強すれば、こんだけ良い成績残せんのに……。めんどくせー奴だな、お前は」

問題集や、チヨークケース、

私が解いた用紙をまとめつつ、

智也センサーは疲れた様に呟くも、

私はそんなにゆったりとはしてられない。

「はいはい、

説教は一年前の一年の時、

とつくに聞き飽きましたから、

それよりも・・・」

と、私が言葉を濁らせるも、

智也センサーはわかってくれてるようで、

「ホラヨ、

ちゃんと帰りには返せよ？」

と、スーツのズボンのポケットから、

一つの鍵をちらつかせた。

私は一つ頷くと、奪う様に鍵を取り、
そのままのいきおいで、廊下を駆け、
『ある場所』へと走る。

「廊下は走らんで貰いたいんだがなー」

『ガチャ・・・、
サアアア』

智也センサーの注意なんて聞かずに私は、
廊下を走り、階段を駆け登り、
辿り着いた場所で、
扉の鍵を外し、開いた。

途端に、少し強い風が私を通り抜けた。

扉の向こうには何も無く、
ただ、だだっ広い空間が広がっており、
その空間を囲う様に、
落下防止のフェンスがある。

そう、

私が今いるのは校舎の屋上。

先程智也センサーに貰った鍵は、
屋上の鍵だったのだ。

私は耳に掛かった髪を下ろして、
ゆったりと、屋上に足を踏み入れる。

扉の真っ正面先のフェンスに、
背を向けて座り込む。

ここが私のお気に入りの場所。

ここに座っていると、
一年の時を思い出す。

一年生時、
入学当初の私は、上級生達に色々と、
目を付けられていた。

まず第一に、髪の色。

上級生の反感を得るので、
一番と呼ばれてもいるであろう事だ。

私の地毛は色素が薄く、
明るい栗色に見える。

それによって、
上級生達に『染めた』だとか、
『パーマかけた』だとか、
一々口うるせえ事ばっか言っ
て来やがる。

そして第二に、性格。

私は、
髪的事で口うるさい事を言っ
てきた
上級生達や、
一年の時から次々と告白して
きた
男子生徒達に、
悲しむ訳でもなければ、
激昂する訳でもなく、
ただただ、さらりと受け流し
ていた。

私はただ、
面倒な事に関わりたくない
から受け流していたのだが、

それがきっかけで
『すましている』だとか
『男子に人気があるから調子
に乗ってる』だとか言われ、
上級生達には、
毎日の如くイヤミを言われ
続けられていた。

上級生に目を付けられていた私に、
入学したての同級生達は、
ただ遠巻きに私を見ているだけだった。

そんな風に、上級生達にイヤミを言われられていた時、
私の環境を、唯一察してくれたのが、
智也センサーだった。

智也センサーは、度々、
私が上級生にイヤミを言われている現場を見ていたらしい。

その度に智也センサーは、
何故、言い返さないのか、
と、疑問に思っていたらしかった。

ある日、
また私が上級生にイヤミ言われていた時だった。

智也センサーがいきなり、
私の手を引いて、
この屋上にまで連れて来たのだ。

智也センサーは、
当時の私の担任でもなければ、
教師でもなく、
関わりは全くなかったので、
すっごく不審に思っていた。

だが、

智也センサーはとても優しい先生だった。

『一之瀬由奈、

俺は数学教師の山瀬智也、よろしくな』

『はぁ・・・、

それで、山瀬先生はなんの用なんですか？』

『一之瀬ー、

めんどくさいのはわかる。

ああ言った連中の相手はしんどいよなー』

『・・・、

用はそれだけですか？

私、次の授業があるんで戻ります・・・

『実はさ、

俺も中高の時、髪的事で色々言われてきたんだわ』

『・・・、それで？』

『一之瀬の気持ちも分かるが、
うぜえ時はうぜえって言っとけよ？

じやなきや、何時まで経っても、
うつつしいまんまだぞ』

『・・・、

そんなの、あんたに言われる筋合いはないし』

『そだなあ・・・、

ま、ちよつと気分転換でもしてろ。

俺は戻るがな』

『は？

え、私授業は？』

『ああ、

保健室行つたとも言つといてやる。

あ、因みにここの扉閉めとかなきやいけねえから。

授業終わりに向かえに来てやつからな』

そう言い残して、

智也センサーは職員室に戻って行つた。

しかも本当に鍵掛けられて、

私は一限の間、ずっと屋上に座り込んでいた。

だが、

そこから見上げた空は、

とても大きく、澄んで綺麗だった。

そんな空を見上げていたら、

今まで我慢してた自分が馬鹿みたいな気分になった。

その後、

向かえに來た智也センサーに、
一発ボディーブロー喰らわせれば、
上級生達に、俗に言う、
御礼参りをしてやった。

「くっ・・・、くくく」

思い出したら笑えてきた。

あんの女共の顔ったら、
驚いたような、
怒ったような、
恐れたような、
色んな感情が混ざった表情には、
後々になって、大笑いしたものだ。

それから、
私は智也センサーに色々とお世話になった。
今では兄貴みたいなものになっていた。

「ふふ・・・」

ふと見上げた空は、あの日の空と同じ様に、
広く、澄んでいた。

ただ、一つ、

『カシヤ・・・』

シャッターを切る音以外は。

第3シャッター（前書き）

多分一ヶ月周期で投稿します

第3シャッター

『カシャ・・・、
カシャ、カシャ』

広い屋上に、この場所とは不釣り合いな、
シャッターの音が響く。

私は不意に聞こえた音の先に、
目をやった。

屋上の出入口たる扉の上の、
ちよつとした場所に、

『そいつ』は立っていた。

サラサラと風に流される黒髪。

身長は170位か？

スラリと伸びた足に、

半袖のカッターから覗かせた腕は、
程よい位に引き締まっている。

『そいつ』は良くCMに出ている、
んと、Nikonか？

とにかく、黒色のカメラを構えて、
空の写真を撮っていた。

「（あ、あの人昨日の・・・）」

ジー、と見ていたら『そいつ』が、
昨日の公園で、写真を撮っていた男だと気付いた。

昨日といい、今日といい、
彼は空を撮るのが好きなんだろうか？

何となく、彼を『ぼー』と眺めていたら、

『ニャーオ、ニャーオ・・・
ニャーオ、ニャーオ・・・』

いきなり携帯が鳴った。

「ん？」

スカートのポケットから、
携帯を取り出して画面を確認する。

メールだ。
内容は、

『一之瀬、ハゲ谷がそっち行く。
降りて来い。from山瀬智也』

との事だった。

「げっ・・・」

ハゲ谷、

国語科の大谷貴也先生。

頭がてっぺんハゲで、

両脇の髪はもつさり生えているので、

ハゲている場所が山の谷間みたいだから、
ハゲ谷と呼ばれている。

あいつには

色々と目を付けられているので、
あまり関わりたくはない。

更に、

ここ屋上は立入禁止になっているので、
何を言われるかわかったもんじゃない。

私は急いで屋上から立ち退こうと、
出口に向かう。

出口の扉の前に来たと同時に、
「よつと・・・」、という声と共に、
上から彼が飛び降りてきた。

彼は私の隣に飛び降り、
身体を起こすと、私の方を見たので、
自然と、隣にいる私と目が合う。

「・・・」
「・・・」

私も彼も何も言わずに、ただ見合った。
初めて彼を近くで見、思った事は・・・、

睫毛長ー・・・

すっとした鼻。

切れ目がちなのに、
何処かダルけた様な瞳。

まあ、普通に調った顔立ちで、
カッコイイんだろうな。

そんな事を思っていたら、
ふい、と彼が目を離し、
先に屋上を出た。

屋上を出た彼に、私も続いて屋上を出る。

『トットットット・・・』

階段を降りる足音が響く。

だが、足音は一つではなく、二つ。

私と、先程の彼の音だ。

あの後、屋上から出て、
階段を降りて行き、
なんとかハゲ谷に遭遇する事はなく、
一安心したのだが、

何故か、私と彼の行き先が同じなのだ。

階段を降りては、同じ方向の廊下を歩き、
階段を下りては、同じ方向の廊下を歩き、
と全くもって同じ行き先なのだ。

「（うーん・・・、
なんか気まずい。
ていうか・・・）」

さっきからちらちらと私達、
目が合ってるないか？

「(ていうか、
合ってるっていうより・・・)」

ちらりと、隣の彼を見る。
ていうか、睨む。

すると、彼もちらりとこちらを見、睨む。

うん、わかった。

私達、お互いに睨み合ってるね・・・。

何故だか、
だんだんと苛々してきたんだろう。

私は彼から少し距離を離して廊下を歩き、
彼も窓際まで離れて歩く。

私はそれから彼を一切見ないでおこうと、
視線を切り、
彼が先に歩くのを確認すると、
反対側に歩いて、階段を降りて行った。

「二度とあいつに近付くのは止めよ。
なんかウザイ・・・」

ポツリー人眩けば、
下駄箱の方へと歩を進めた。

なんだけど・・・

『カタン・・・』

「・・・」
「・・・」

ザ・未知との遭遇っ！！

と私達の上に、

デカデカと浮かんでいる事だろう。

私、そして彼の口元はびくびくと、
引き攣っている。

とりあえず私は、目線を再び切り、

下駄箱からローファーを取り出して、履き変える。

そして、玄関を出て、校門を抜け、下校する。

「はぁ・・・。

上山で晩御飯とシュークリームでも買って、気分変えよ）」

私は心の中で呟いた。

現在位置、スーパー上山、惣菜コーナー。

私は何時も通り、10分待ち、

出来立てホカホカのスペシャル弁当、肉、野菜、果物全て揃ったオードブル。

この二つに手を伸ばしたのだが、

隣から他の人の手が伸びてきた。

手に目線を寄せ、

ゆっくり上へ目線を上げていけば・・・

学校のあいっだった・・・。

うん、何故？

と考えを巡らせれば、

答えは一つしか出て来なかった。

そして、不意に口に出てしまった。

『ストーキングしてんじゃねえよ、
クソ野郎』

あれ？

今こいつなんて言った？

鼓膜に響いた声を、再度脳内で再生する。

「ストーキングしてんじゃねえよ、クソ野郎」

うん、

もう一度。

「ストーキングしてんじゃねえよ、クソ野郎」

.....

「はあああつ!？」

なにそれ、ストーキングしてんのはあんたでしょつ!？」

ついに我慢出来なくなり、

私はこの場所を忘れて叫んでしまった。

そしてこの行為が、

悲劇のはじまりだった。

「はあつ!？」

ふざけんなつ、学校からずっとストーキングしてんのはお前だろうがっ!」

「ストーキングしてんのはあんただよっ!」

屋上からずっと私の行く先々、ずっとつけて来やがってっ！

この変態っ、変質者っ、

キモいんだよっ、その睫毛っ！

男かニューハーフか

どっちかにしやがれやっ！！」

「やかましいわっ！！

台詞が長げえんだよっ！！

聞き取んのに必死になっちまったろうがっ！！

んでっ

この睫毛は生まれてからずっとだわっ！！

お前こそ女かオナベかどっちかにしやがれっ！！」

「丁寧に説明なんざしてんじゃねえよっ！！

あんたはニュースキヤスターかつ！！

アナウンサーかつ！！

落語家かつ！！

それとあたしはれっきとした女だっ！！」

「落語家ってなんだっ！

最初の二つは解るが、

落語家ってなんだっ！！

つか、解んのかよ俺っ！！

ていうかつ、

そんな道路補整した様なぺったんこでっ、つるっつるな胸晒して
何が女だっ！

イソフラボン取れっボケ女っ！！」

「ぐだぐだぐだ長ったらしいんだよっ！

ぺったんこで何が悪いっ！

第一イソフラボンなんかで胸がデカクなるかっ！！」

こんな言い争いを小1時間し、

最終的に、店員さんに、

『喧嘩なら、表でやりな・・・』

と、言われたので、私達は別れた。

しかし・・・、

あの人は本当に店員さん・・・？

何故か893と呼ばれる様な方々と同じ様な、感じてしたが・・・

そんなこんなで、自宅前。

鍵を開けようと、財布から鍵を取り出そうとしたのだが・・・、

私の動きは完全に止まった。

何故？

いやいや、解ろつか皆さん。

先程の憎つくき奴が、
隣で同じ様に固まってるカラニ、
キマッテルジャナイデスカー

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『テンメエーッッッ！！！！！！』

「ストーカーもいい加減にしやがれっ！！
お前アレかっ！？
ヤンデレって奴か！？」

「ふざけた事言ってんじゃないわよっ
ミミズ（ピー）野郎っ！！
例えヤンでも
あんたみたいなミミズみたいな（ピー）野郎なんかデレてたまる
かっ！！」

「おまつ、それは夜にそんなデカデカと言う言葉かっ！！
ついでに俺はミミズみたいな（ピー）じゃねえよっ！！
俺のはれっきとした蛇だっ！！

「つて、俺はなんて事デカデカと言ってんだーっ！！」

「皆さーんっ！！
ここに変態がいますーっ！！

「こんな夜なのに（ピー）なんて下系の言葉言ってますーっ！！」

「お前っ！！
それ最初に叫んだのお前だろうがっ！！」

「犯されるーっ!!
犯されるーっ!!」

「誤解を生む様な事叫ぶなーっ!!」

ストーカー野郎が一際大きく叫んだ時だった。

『バンッ!!』

と、勢い良く、

向かいの家の扉が開き、

パンチパーマでデカデカと太った、

オバサンが出て来た。

その扉を勢い良く開いた音で、
私、そしてストーカー野郎も、
まるで古い泥棒が、

忍び足をしている様なポーズで固まってしまっている。

だが、オバサンは全く気にしてない様で、
威圧感丸出しで、静かに喋りかけて来た。

「あんたら・・・、
うるさいんだよ・・・。」

（ピー）とか（ピー）とか（ピー）とか・・・。

若いから性的行為が気になるのは解るがね、
場所をわきまえな・・・。

それと、

御近所迷惑と言う言葉・・・。

・・・解るね？」

オバサンは言い終わりと同時に、
眉間にシワを寄せたまま無理に笑顔を、
私達に向けてきた。

うん、怖い・・・。
ただ、怖い・・・。

私（そしてストーカー野郎）は、
あまりの恐怖で、ただコクコクと頷いていた。

オバサンは笑顔を止めると、
静かに、自宅へと帰って行った。

オバサンが帰った後、
私達は恐怖のあまり、
ただ静かに家の鍵を開けて、
家の中へ入って行った。

私は家の中に入ると、
冷蔵庫に、
買ってきたお弁当とオードブルを入れ、
自室へと向かう。

だが、自室に入った途端、
なんとも言い難い苛つきを覚え、
ふと、カーテンを開けた。

すると、向かい側の家のカーテンも開き、
カーテンを開けた人物と目が合い言葉を無くす。

その人物は、静かに窓を開け、
窓の縁に手を置き、プルプルと震えている。

更には、こちらに上目遣いだが、
威嚇する様に睨んでいる。

私は、その睨みに答え様と、
私も窓を開け、縁に手を置く。
そして、ギリギリと歯ぎしりしながら、
睨み返す。

一、二分、睨み合いを続けた後、
私とその人物は、大きく息を吸い込むと、
ある言葉と共に、一気に吐き出した。

『このストーカー野郎——ッッッ！——！』

それからの事は良く覚えてない。
ただ、お互い（ピー）とか（ピー）とか、
下品な事を言い合ったり、
お互い物を投げ合ったり
（私の猫グッズは、一切手を出してない）、
ある種、小規模な戦争に発展していた。

だが、戦争が発展し過ぎ、
遂には、

お互いの部屋に殴り込もうとした時、

突如、あいつが消えれば、

玄関のチャイムが鳴り響き、

仕方なく玄関に向かうと、

先程のオバサンがおり、

恐々と付いて行けば、

あいつが何故か正座した状態で、
俯いていたのだ。

その状態のあいつを見、

私は、今から起こる惨劇が、
予期出来た。

そして、こう思った。

「（私、こいつの事嫌いだ・・・）」

第4シャッター（前書き）

遅れおそばしたノ；

第4シャッター

『ニャーオ、ニャピッ』

私は、鳴ったアラームを直ぐさま止めた。

「眠れなかった・・・」

はぁ・・・、

と、私は溜め息を一つ吐く。

結局あの後、

オバサンに散々説教され、

疲れ切った状態で自室に戻ったが、

苛々は晴れる事は無く、

ずっと苛々しっぱなしで、

眠る事が出来なかった。

「はぁ、行かなきゃな・・・」

しかし、いくら身体が疲弊しようと、
一睡も出来なかつと、

世界は『まわり』、お日様は昇るのだ。

「イツテキマース・・・」

誰もいない家の中に声をかければ、
玄関を開け、外に出る。

『ガチャリ』と、鍵をかけ、
歩き出したのだが、
いきなり、隣からまた『ガチャリ』と音が聞こえた。

ゆっくりと隣を見れば、
昨日のあいつと目が合った。

「・・・」

「・・・」

私達はただただ、黙って歩いている。

制服を着ている所、
彼も夏季講習中なのだろう。

鳴き喚く蝉の声をBGMに、
私達は通学路を歩く。

「なあ・・・」

歩き始めて三十分弱。

コンビニに差し掛かった時、
いきなり彼から声をかけられた。

私はちらりと、一回彼を見れば、
再び前へ視線を戻し、

「なに？」

と、素っ気なく答えた。

「お前、一之瀬だろ？
一年ん時ゆーめいだった」

「有名かどうかは知らないけど、
それが何か？」

「ふーん、

話に聞いてた通りだな。

ツンツンしたブスーな女」

「あつそ、誰に聞いたか知らないけど、
あんた程不細工では無いと思うけど？」

「は、負けず嫌いも、
そーとーだな。

そりゃ上から反感買うことだ」

「今は別に、
上の奴らがどうこう言っ来ないし、
友達も、兄貴分もいるから別に良い。

ていうか、
なんであんたみたいなストーカーと、
こんな話してんだか・・・」

「だからストーカーはデメエだっつーの」

「なに？また喧嘩しようってか？
受けて立とうじゃないか」

「んだと？」

この『まな板女』」

「やろうつての？」

この『ミミズ（ピー）野郎』」

「だからお前・・・、

そういうのを外で言うなよ・・・。」

その後、昨日みたくではないが、
ギヤース力、ギヤース力、

口喧嘩していたら、

いつの間にか校門まで着いていた。

学校を目にすれば、

私も彼も途端に静かになり、

二人同じく、校門に背を寄りかけた。

「なあーよー・・・」

「なに・・・？」

校門前にて、待つこと1時間。

漸く気付いたのか、

彼が遠慮がちに口を利いていた。

「一つ質問ヨロシ？」

「アイアイ、ナンデシヨーカー」

「・・・・・・、

今日は何日でしたっけ？」

「ソーデスネ、

確か、『15日』だった筈デスガ」

「そうですか、そうですか。

ではもう一つ、

・・・夏季講習は何日と何日でしたっけ？」

「・・・・・・、

10～14、17～20デスネ」

「・・・・・・、

もっかい聞いて良い？」

「ドーゾー」

「今日何日？」

「ジューゴー」

「・・・」

「・・・」

「帰ろ・・・」

「私もそうする・・・」

恐らく

昨日のオバサンの説教のおかげだろう、

彼も私も、今日講習がない日だった事を忘れていたのだ。

私達は今来た道を辿り、帰宅している。

私達の間には会話は無く、
彼も私も、

ただ無言でケータイを弄っている。

校門から歩き始めて三十分弱。
先程彼が私に話し掛けてきた、
コンビ二前まで来た。

私は彼と一緒にいるのが嫌なので、
コンビ二で雑誌でも呼んで時間を潰そうかと思い、歩を先に進める。

いざ入らんとした時、
私達の目の前で、
不意にコンビ二の自動ドアが開き、
『ある人物』が現れた。

その『ある人物』とは、

「あ？一之瀬？
なにやってんだ？こんな所で」

夏季講習の担当先生の一人、
私の兄貴分、山瀬智也先生だった。

「あ、智也センサー・・・。
あー、ちよつと日にち間違えて学校行っちゃって」

私はポリポリと頬を掻く素振りをし、
今さっきの事を伝えて、

『智也センサーこそ、

どうしてここに?』と、

問おうと口を開こうとしたが、

『あいつ』の言葉で、口をあぐりさせる事になった。

「智兄?

なんで此処にいんの?」

「・・・は?

・・・智兄?」

「いやー、

にしても偶然ってあんだなー」

その後、

『あいつ』の驚愕の言葉を聞き、

頭が?だらけになった私と、

驚愕の新事実を告げた『あいつ』は、

共に、智也先生の家に連れて来られた。

智也先生の話によると、
どうやら、『あいつ』と智也先生は、
血の繋がった兄弟ではなく、
親戚同士だと言う事が解り、
昔から色々と遊んでいたらしいので、
『あいつ』は智也先生の事を『智兄』、
と呼んでいるそうだ。

で、その『智兄』はリビングのソファ―に腰掛けている、
私と『あいつ』のお茶を汲んでいる。

「まさか一之瀬と桐也が隣同士に住んでたなんてなー。
問題児同士、仲良くなってくれよ？」

今更ながらあいつの名前を言っておこう。
彼は片守桐也。

『片守』と書いて『かたかみ』と読むらしい。
桐也は普通に『きりや』。

なんかちょっとカッコイイのがムカつく。

「問題児ってどういう事ですか」

「問題児は問題児だ。」

一之瀬、お前は誰彼問わず喧嘩売ってるし、
桐也、お前は授業出ねえし、

二人共十分問題児だ。

たまにはフォローする俺の身にもなれよ・・・」

『それが教師の役割だろ?』

ご丁寧に説明して、

最終的に自分の話で肩を落とした智也先生に、
私と片守は同じ台詞を発した。

「じゃ、またね、智也センセー」

「またな、智兄」

「おう、

ちゃんと日程は確認しとけよ?」

あの後、しばらく雑談し、
飽きてきた所で、

智也先生がWiiOを取り出して、
色々とゲームで遊んだ。

気が付けば、

夜の6時近くになっていたので、
私と片守は帰る事となった。

智也先生に挨拶をし、同じ帰り道、
私達は二人並んで歩いている。

「・・・」

「・・・」

とーぜん、

私達の間には会話はない。

と、思ったのだが、

いきなり片守が、
不躰にこんな事を聞いてきた。

「お前、友達いるんだってな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714w/>

彼と私と空と

2011年11月2日19時13分発行